

子どもの生きがい

はじめに

「そろそろ子どもの生きがいを書いてよいころでしょう」と原稿の依頼を受けた。わが子はもう二歳の誕生日を過ぎたら、そういうころなのかなと単純に引き受けてしまった。しかし、いざ書こうとすると、子どもの生きがいを書いてよいころとは、どんな意味でいわれたのか、はたして本当によいころなのだろうかとちゅうちょせざるを得ない。

児童学科卒業後、幼稚園と短大保育科に勤め、子どもたちのことについて考えている間は、将来自分の子どもはこう育てたいと種々の期待をもっていた。しかし現実には自分の子どもを育てること二年余を経て、どうも以前に考えていたことは、遠大

な夢のごとき存在にすぎず、いざ自分の育児をもとにして子どもの生きがいについてまとめようとする、望ましくない親の育児の公開のようで、全く面目ないしだいである。

成長記録

子どもに関する書物では、成長記録を克明に記し、それを基礎にして物事を論じていることがしばしばある。最も身近に対象者が存在するのであるから、記録をとって、子どもを知る参考にしたいたと、あれこれ方法を思いめぐらしていた。しかし母親というものは、なんとも雑事が多く、その上意志の弱い私は、かなり短期間で継続した記録をとることをあっさりとおきらめてしまい、以後は気のむくまま、心のむくまま記録をとろうと

菊池 百合



いうことにせざるを得なかった。

わが子の記録をとりながら感ずるのは、幼稚園やその他の幼児グループで記録をとっていた時のように、個々の子どもを客観的にみることができにくくなっていることである。いわゆる親馬鹿根性が頭をもたげてしまい、視野の狭い、わが子中心の記録、それも親の自己満足のための記録になっているのではないかと思えることである。それにもかかわらず、少しずつ記録はふえていく。

子どもの生きがいとは

子どもの生きがいについて考えてみると、子どもの生活の中で、子どもが喜々として遊んでいる時、何かに熱中している時、充実した時をすごしている時、子どもは生きがいを感じているのではないかと思う。

子どもがそのような状態にあるかどうかは、親の判断で勝手に決めてしまいがちであり、はたして本当に子どものそれと一致しているかどうかは問題である。時として、親が自分の期待を生きがいとして子どもにおしつけていることもありうることであろう。

どんな時に遊びに熱中し、遊びが充実しているかは、年齢、性別、個性、環境等によりかなり違うものになるが、親や周

囲の人に受容され、安定した場で遊んでいる場合は、比較的これに属する遊びがよくみられるといつてよからう。

したがって、子どもが生きがいを感じて過ごすためには、親や周囲の人々の理解や協力が必要になる。そしてこれは子どもを育てる親の生きがいにつながることになる。

乳児保育

わが子が、十ヵ月から一年四ヵ月の約半年間、週一、二回、お茶の水女子大学で行なわれている乳児保育に、母子で参加した。これは乳児の集団保育施設を研究するためのものであり、その時期には、零歳〜三歳の子ども、五〜十人が、三〜五人の大人と、一日五時間ぐらいを共にすごしていた。親の都合で、子どもの人数や年齢はかなり変動したこともあった。

子どもの数の割に、大人の数が多いため、直接に子どもの世話をせずともよいことがあり、やや客観的にわが子を観察し考える機会になった。乳児保育で喜んで遊んでいたと思われる場面をもとに、成長の姿を追ってみた。月齢が進むにつれて、子どもが興味を示す遊びが変化していくことは、子どもの生きがいを考えるとき、子どもの成長の姿をよく把握しなければならぬことを感じさせられた。

おもちゃへの興味・友だちへの興味・場への安定感・大人へ

の信頼感等により遊びは大きく左右された。はじめのうちは、何かしようとする、母親をさがし、そばにいてもらいだが、次のおもちゃに移ろうとする時も、母親の姿を求めていた。みづからなかつたり、少し離れた所にいたりすると大声で泣いた。都合によって母親がいられない時などは、保育者にびつたり身体をつけてだかれて、三十分近くも泣いたりした。しかし二時間以上も落ち着いて昼寝をしてしまうこともあったりと、活動の状況は他の要因がからみ一定していなかった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

十カ月

おもちゃの電話を好んで使う。部屋に入りすぐに電話をさがし、ベルをならしたり、ダイヤルをまわしたりする。

しかし他人と話をしたり、きいたりする用途には用いない。これはすわっていても使えるし、他人とかかわりあいない、ひとりでできるし、動くし、音も出るためかと思われ

る。

十一カ月

電話は相変わらず気に入らずに使う。ベルをならしていると、ねじの部分動くので、そこをさわったりする。カタカタ自動車（押して歩くと音の出るもの）・プープー人形（ゴム製で押すと音がでるもの）・タンブリン・ままごとのフ

ライパン（自分の絵本と同じ絵がついているもの）を好んで使う。

数歩歩くことができるようになり、歩くことに興味を示す。年上の子がおしゃべりをしつづ遊ぶのに刺激されてか、声を出すことを喜び、声を出して遊ぶことが多くなり、大人と関係をもちたがる。おもちゃも動かすことにより音の出るものを好む。

一年

お手玉・カタカタ自動車・小さなトラック・ボール・棒等数多いものを次々に手にするが、それを用いて遊ぶというよりも、他人のまねをして後からついて歩くために使うのと、そばに他の子どもが近づいてきて警戒する時になげたり、物と物をぶつけて音を出すために用いる。

自分から小さな行動をおこすことを始める。

一年一カ月

マジックで描く。自動車・積木等特に気に入ったおもちゃはなかつた。ほかの子が遊ぶのを見て喜んだり、やや大きい子の後についてこわごわと遊びをまねてみたり、かなり自由に歩けるようになったため、遊びそのものに変化がみられる。

一年二ヵ月

プールをいはじめたが、中に入ることは抵抗を示し、コップで水をくんでこぼしたり、砂場に水を運んで砂遊びをしたりする。初めはびくびくしつつかしてしたが、長時間やめようとしなかった。水と砂の感触が楽しかったらしい。

一年三ヵ月

すべり台（二ヵ月前は近よってもこわがり使おうとしなかった）・タンブリン・小さい自動車・積木等を使用した。すべり台は積極的に参加したものであるが、その他はあちこち歩いているうちに偶然に手にふれて使ってみるという感じで、他人がしているのをまねたり、他人が使っているのをほしがったりする。そのためになぐられたり、つねられたりし、自分もなぐり、つねり、大泣きし、フラストレーションが強い。

すべり台のように身体を使う遊びに参加したり、独占したいため友だちと衝突したり、かなり成長がみられる。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

家庭で母親と二人だけですぐす中では得られない多くのことを経験したと思う。年上の子たちが歩きまわるのに刺激されたり、広い乳児室のあちこちに移動しなければならぬ必要からか、歩きはじめは比較的早く、十一月はじめには、七、八歩

ひとりで歩いた。また子どもたちのおしゃべりの中で遊ぶうちに、声を出すことに興味を示し、アーやウーという音が、ハイとかダーチ・ブーということばに変化した。

刺激が強かったために習得したのも多かったが、家庭にいるよりも多くのフラストレーションもあわせて経験したことはいなめない。

子どもが喜んでしたこと

正確には、多分、喜んでしたと思われることである。比較的長時間おとなしく熱中して遊んでいたことをひろってみると、ほとんど親の目が届かない所で、ひとり黙々としていたことである。つまり、どんなことをしてもすぐには禁止されず、思うままにいられた場合で、たとえば次のようなことがある。

- ・カセットテープを箱から出して、テープの部分をどんどん長くひき出し、ごちゃごちゃにする。うまくひき出せない時でも、力を入れてひっぱったらしくテープは細くよじれてしまっていた。

- ・粘土を缶から出して小さくちぎり、ままごとのなべ、ちゃわん等に入れ、次にあちこちに散らして歩く。

- ・哺乳瓶の牛乳を、ポタポタとふとんや新聞紙、その他あちこちにたらしめて歩く。ぬらした部分を手でこしこする。

その他この種のことは、数限りなくある。どれをみても、実に楽しそうに熱中して遊んでいる。しかし親として管理上みると、どうも充実しているからと続けさせるにはかなり抵抗があり、勇気のいることである。したがって親にみづからずじに続けられた間は、子どもにとってはしあわせな時だったであろう。

すぐにやめさせたいこのような遊びの中に、子どもの生きがい結びつくようなことがみられる。このようなことを通して、大人のまねをし、大きくなったつもりになったり、偶然に気づいたことを続けているうちにもしろいことを発見したり、成長の階段を急に数段登った気分ひたれることであろう。このように子どもが楽しんでいられるスリルのある遊びを、子どもが理解できない大人の勝手な都合で無理やりやめさせたり、その上叱ったりするのであるから、なんとも子どもにとっては受難である。時には、やめさせた後になってから気づき、別のものを与えたり、それと同じようなことを経験させるにはどうしたらよからうと、ほんの少し考えたりはするが、児童学を学んだ母親としてはまことに面目ない話である。

友だちと遊びたい

楽しいことをしていて叱られるなら、親の目の届かぬ所に逃げようとして友だちを求めたのではないことをひそかに望むのでは

あるが、一歳後半から言葉や行動がかなり活発になり、友だちと遊びたいという気持ちが強くなってきた。最近は一五時間ぐらいいは、二歳～五歳の友だちと遊んでいる。友だちと遊びはじめたころは、「ママモー、イッチョー」と手をひっぱられ一緒に歩いて歩かされたが、最近では、「オカーシャーン、バイバイン」と手をふって帰れと催促され、ひとりで友だちの中に入って遊ぶことが多くなってきた。

年齢の高い子と遊んでいる時は、行動範囲が広くなり、さがしまわらねばならないことがしばしばある。ある時は建築工場の砂で砂遊びをしていたり、ある時はトマト畑でトマトをもらいで、それを地面にこすりつけ、トマトの汁で地面の色が変わるのと、トマトがこするたびに小さくなることを楽しんだりしていることもあり、親の保護不足を責められそうなことが起ったりもする。

相手が年上か年下か、力が強いか弱いかの判断は実に敏感で、相手が年下で弱いとわかると、さっと近よりおもちゃを取ってしまったり、つきたおしたりするが、相手が年上でとうていかなわないと直感すると、攻撃せずにおとなしくみている。

遊びをみていると、友だちと一緒に遊んでいても、まわりの人とは無関係にひとりで遊んでいることが多い。自分のペースで他の子に語りかけ、反応がなくても平然と遊びを続けている。

このような時は、割合好きな遊びに熱中しているときである。友だちの後についてまわり、年上の人の遊びを見ていたり、遊びをまねようとするこもしばしば見られる。『ひとまねこざる』のごとく、なんでもまねをしてみたがる。ごっこ遊びが子どもに好まれるのもこのためであろうと、つくづく感じさせられる。友だちの遊びをまねたり、ごっこ遊びのような遊びはとても多い。

☆ ☆ ☆ ☆

・小学生が「あぶくたつた」をしているのを見て、「アブクタツタ、ミネタツタ」「ムチャムチャムチャ」と髪の毛をこちやこちやる。

・砂場で遊んでいて、他の子が立てば立ち、すわればすわり、手をこすればこすり、砂をすくえばすくいと、一つ一つの行動をまねる。テレビを見ているも同じようなことがある。

・おもちゃのベビーカーにお人形を乗せて、もう一つのお人形をおぶい、買物かごを二つ三つぶらさげて、「オカイモノ、イッテマイマーシュノ」とあちこち行ったり来たりする。

・お人形をトイレにつれていき、「チッコ？チーチー、データ？」「フキフキネノ」といつも自分がされているように言葉をかける。

・小さな缶をコップにみため、スプーンでガチャガチャかきま

せて、スプーンを口にはこびたべるまねをする。

☆ ☆ ☆ ☆

友だちとよく遊んで、生き生きと動きまわっている姿は、子どもにとって満たされた時をすごしている姿と思われる。こんな遊びの中から生きがいを感じ、成長した時に役立つ時であってほしいと期待しながら、次々とめまぐるしく動きまわる子どもをみている。

おわりに

子どもの生きがいということ、どんな時に生きがいを感じるか、どうしたらそのような機会を与えてあげられるか等を考えてみた。わが子と共にごしたこの二年余、あまりにも望ましくない親であったことを反省せざるを得なかった。子どもが成長した時、充実した子ども時代をすごせたことを喜んでもらえるような、そして親としても満足のいく日々をつくり出せたらと、自分の育児態度を考えなおしている。子どもの生きがいというよりもむしろ親の生きがいかもしれない。

（東京保育女子学院）